

リカードウ『原理』第20章の研究

佐藤 滋 正

本稿は、リカードウ『原理』第20章「価値と富、その示差的な特性」におけるセイ批判を、『原理』初・2版と第3版、リカードウとセイの「書簡」、セイの『経済学概論』第2、4、5版、およびスミス『国富論』、を素材として研究したものである。論旨を一言で述べるならば、リカードウは、セイの「効用」概念を媒介にした「価値」の「交換価値」への横滑り論を批判し、また、セイの富の絶対的増大論は評価しつつも、そこに前提されてしまっている「土地所有」への無自覚を批判した、ということになるだろう。(二)(三)では『原理』第3版の概観が、(四)では「書簡」を通して第3版の改訂に至る経緯がそれぞれ示され、また、(五)では『原理』初・2版と第3版の対比的吟味が、(六)では第3版出版後のリカードウとセイの「書簡」に見られる両者の理論的対立点の析出が、そして(七)ではリカードウ第20章の資本蓄積論的総括が、それぞれ試みられている。

キーワード 富と価値の区別、効用、自然的富、生産費、企業家、土地所有、穀物尺度論、J.B.セイ

目 次 (一)～(七)

(一)

リカードウ『経済学および課税の原理』(第3版)の第20章は、「価値と富、その示差的な特性 *Value and Riches, their Distinctive Properties* 」と題されている。¹⁾ 同章は、第19章と第21章の間に

1) 本稿では、P.スラッフア編『デイヴィッド・リカードウ全集』(*The Works and Correspondence of David Ricardo*, edited by Piero Sraffa with the collaboration of M.H.Dobb, Cambridge University Press, 11 vols., 1951～73) をテキストとして用いる。引用に際しては、引用頁を(i.p.×××)のように略記し本文中に挿入して示すことにする。ただし「書簡」のばあいには、煩雑を避けるために書簡番号を(×××)のように略記することもある。またスミスとセイの著作については、A.Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by E.Cannan, Charles E.Tuttle Company, 1979、および、J.-B. Say, *Traité d'économie politique, ou simple exposition de la manière dont se forment, se distribuent et se consomment les richesses*(1803), ed.2, Paris, 1814, ed.4, Paris, 1819, ed.5, Paris, 1826 をテキストとして用いる。引用に際しては、同様に、(WN., p.×××)、(Say, ed.2, tom.1, p.×××) のように略記して本文中に挿入して示す。尚、引用文中、斜線(/) は行替えを、傍点(` ` `) は原著者の強調をそれぞれ示し、それ以外の強調符(° ° °)、アンダーライン、および[] は、すべて筆者のものである。

挟まれ、これらとともに『原理』「論争的諸章」部分(第19章～第32章)の導入部分を構成している。すなわち、第19章「貿易路における突然の変化について」でリカードウは、戦時から平時への転換に伴う貿易径路の変化と、そこに潜在する国富増大の可能性の中での資本移動の効果の問題を扱い、また第21章「蓄積の利潤と利子への効果」では、資本蓄積が利潤率を低下させると説いたスミスに対して、資本蓄積そのものが利潤率に直接作用するわけではなく、利潤は賃金騰貴によってのみ低落するという議論を展開した。このことは、“富と価値の区別論”として知られる第20章が、その検討に際しては単に“価値論”の用語上の定義を云々するものとしてだけでなく、“資本蓄積論”の文脈の中での“価値論”の再定義・再展開としても読まれるべきことを示唆している。

第20章は「論争的諸章」部分の中では、第32章・第27章・第22章に次ぐかなり長い叙述分量をもつ章である。先行する経済諸理論への批判を通して自説を展開するという叙述スタイルは他の多くの「論争的諸章」と共通するものだが、第20章は、特にJ.B.セイとの関連で注目される。リカードウは『原理』「序文」で、セイをスミスと並ぶ主要な批判対象であると言いながら(*cf.*, I, pp.6~7)、本文中でのセイに関する記述は概して断片的なものに留まっている。その点でこの第20章は、セイについてのまとまった叙述がおこなわれている唯一の章であること、『原理』第3版での大幅な改訂を施された章の一つであること、さらにまたこの章がスミスを批判するセイへのリカードウの批判という重畳的な叙述構造になっていること、によって注目される。本稿はこのような問題意識をもって、第20章におけるリカードウのセイ批判の探究をおこなうものである。²⁾

ところで第20章の検討に入る前に、「富」と「価値」に関する次の二つの基本的な事柄に触れておきたい。

まず、「富と価値の区別」ということそのものについてである。一般に日常語で「価値」は、その商品がどれだけの他商品を購入・支配できるかという「交換価値」の意味で使用されている。これに対してリカードウは、「価値」は「生産の難易 *difficulty or facility of production*」に依存すると言って、労働生産性と結びつけた「価値」の定義をおこなった(*cf.*, I, p.273)。「生産の難易」とは、産出される「富」の大小に密接に関わる概念であるから、リカードウは「価値」を「交換価値」でなく「富」との相関でとらえるべきことを主張したわけである。このことは、“富と価値の区別”と言うばあい、それは「富」と「価値」の“切断”というよりもむしろ“連関”の主張であることを示唆している。「区別」とはすなわち「関連」づけのことである。この意味あいを理解しないと、第20章を読み誤ることになる。

次に、「富の尺度」と「価値の尺度」について。あまり指摘されぬことだが、リカードウには「価値の尺度 *measure of value*」とともに「富の尺度 *measure of riches*」(I, p.280)という概念がある。「価値の尺度」とは、言うまでもなく諸商品の価値を測定する尺度のことであり、諸商品は尺度財に選ば

2) リカードウのセイ批判については、拙稿「『原理』におけるリカードウのセイ評価」(『尾道大学経済情報論集』Vol.3, No.2, 2003年)も参照されたい。同稿での「企業家」概念へのリカードウのセイ評価の収斂という議論に続いて、本稿はリカードウのセイ批判を、スミスを踏まえつつ、“資本蓄積論”の文脈において摘出しようとしたものである。

れた財貨のどれだけを購入・支配できるかによって自らの価値の大きさを表示する。リカードウは、この「価値の尺度」がしばしば「富の尺度」と混同され、そのため、一国の富裕が価値尺度財のどれだけを獲得できるか、つまり価値尺度財の豊富さが一国の富を規定するという代表象が成立してしまうことを問題にしている。貨幣や穀物や労働のような価値尺度財の豊富が一国を富裕にする、と錯誤されるのである。³⁾ とりわけ「穀物」のばあいには、「穀物」は動員できる「労働」量をも規定すると考えられるから、「労働」概念の限局を通して“穀物=富論”を完成しがちである。スミスの“穀物尺度論”批判が、第20章では「価値の尺度」の「富の尺度」への横滑り論として展開されていることに、あらかじめ注意を促しておきたい。⁴⁾

これらの諸事項に留意しつつ、以下、『原理』第20章の検討をおこなうことにしよう。(二)(三)では第3版の叙述の概観が、(四)では「書簡」を通して『原理』第3版の改訂に至る経緯が、(五)では改訂される前の『原理』初・2版の対比的吟味が、(六)では第3版出版後のリカードウとセイの「書簡」に見られる両者の理論的対立点の析出が、そして(七)ではリカードウ第20章の資本蓄積論的総括が、それぞれ述べられるであろう。

(二)

第20章は、スミスに関する前半部分と、セイに関する後半部分とに分けて読むことができる。とはいえ、スミスの「富の尺度」と「価値の尺度」に関する前半部分の記述は、そのままセイの“富と価値の混同論”批判への導入にもなっているわけで、その点に留意するならば安易な二分化には慎重であってよい。事実、前半部分にも、例えばセイのスミス穀物尺度論への傾斜に関する注記や明らかにセイを意識したローダーデイル批判が認められるから、第20章全体をリカードウのセイ理論への批判章とみなすことも不可能ではない。本項ではこのような見方も頭に置きつつ、ひとまず第20章の前半部分の叙述を掘り起こしていくことにする。

第20章の冒頭でリカードウは、『国富論』から、「人は人間生活の必需品・便益品・娯楽品を享受する程度に応じて豊かだったり貧しかったりする」(cf., *WN.*, p.30)という一節を引用し、だからスミスは「価値は本質的に富とは異なる」ことを把握していた、と述べている。例えば同一の「価値」を生産する100万人の労働は、「機械の発明・熟練の向上・より良い分業・新市場の発見」という「社会状態」の

3) 「価値の尺度」である「貨幣」「穀物」「労働」を「富の尺度」と混同することについて、リカードウは第20章で次のように明確に述べている。

「ある人は、……一国民はそのあらゆる種類の諸商品をより多いあるいはより少ない貨幣と交換できるかに比例してより富裕にあるいはより貧困になる、と考える。他の人は、……一国はその国の諸商品がより多くの穀物と交換されるかより少ない穀物と交換されるかに応じてより富裕になるかより貧困になる、と表象する。さらに、一国はその国が購買できる労働の量に応じてより富裕になるかより貧困になる、と考える人もいる。」(I, pp.274~5)

4) スミスの“穀物尺度論”が、「あらゆる物の貨幣価格は必然的に穀物の貨幣価格との比例関係において騰落する」(*WN.*, p.477)という“穀価波及説”と穀物の「真の価値」論(*WN.*, p.482)から生成してくることにについては、拙稿「リカードウのスミス『奨励金論』批判」(『尾道大学経済情報論集』Vol.2, No.2, 2002年)を参照されたい。

相違に応じて異なった量の「富」を産出するわけだが、スミスはこの「富」と「価値」の関係性の中での乖離の可能性、つまり「富」と「価値」のまさに本質的な「区別」を正当に把握していた、とリカードは主張するのである (cf., I.p.273)。⁵⁾

このかなり強引なスミスの読み込みを通して、リカードが富と価値を、“単なる労働”でなく機械・熟練・分業・市場という“一定の社会状態に支えられた労働”によって媒介させようとしていることに注意しておきたい。「富」と「価値」は、選択される「社会状態」によっては多様な乖離形態を示しうる、とリカードはとらえているのである。⁶⁾ ところが従来の経済学は、往々にして「富の増大」と「価値の増大」を「同一事を意味する」と考えることによって、「社会状態」についてのこの議論を封殺してきた、とリカードは言うのである (cf., I.p.274)。

リカードの念頭にあるのは、スミスの“穀物尺度論”である。穀物を価値の尺度にすることが問題なのではない。⁷⁾ 不変でないにもかかわらずある特定商品を暫定的に「尺度」とすることは可能だし、そのような「仮説的」な議論をおこなうことは、「尺度」そのものの“困難”を明らかにし、錯雑とした認識を反省させる上でむしろ有効でありえよう。⁸⁾ 問題は、「労働」の支配・動員が一元的に「穀物」によって規制されるというあまりに単純な想定を置くところにある。⁹⁾ これによって「社会状態」との相関を内包した“富を生産する労働”は、“価値を生産する単なる労働”へと抽象化され、それとともに、「労働

5) 「そうだとすれば、価値は本質的に富とは異なる。というのは、価値は豊富に依存するのではなく、生産の難易に依存するのだからである。製造業における100万人の労働は常に同一の価値を生産するだろうが、常に同一の富を生産するとはかぎらないだろう。機械の発明・熟練の向上・より良い分業・より有利な交換がおこなわれる新市場の発見によって、100万人はある社会状態 state of society では他の社会状態で生産できる富、すなわち『必需品・便益品・娯楽品』の量の2倍あるいは3倍を生産するかも知れない。しかしそれだからといって、彼らは価値に何程かを付け加えるわけではないだろう。というのは、あらゆるものはそれを生産することの難易に比例して、換言すればその生産に使用される労働の量に比例して、価値において騰落するからである。」(I.p.273)

6) 実はこれは第19章の主題であった。貿易路の変化に伴う新たな国内資本配置への移行は、資本の未消費部分の強制的廃棄(サンク・コスト)という一時的な社会的苦痛を伴うだろうが、新たな“富増大”の可能性に向かって踏み出すべし、とリカードは主張していた (cf., I.p.271)。この資本廃棄の議論は、第20章でも再述されている (cf., I.p.274)。

7) 穀物の価値尺度としての不適格性については、スミスは十分に自覚的である。『国富論』第一篇第5章でスミスは、「労働」こそが諸商品の価値を比較できる「唯一の正確な価値尺度」であると言い、しかし同時に近似的な尺度としての「穀物」と「銀」にも触れ、「世紀から世紀にわたる長期のばあい」には穀物が、「年々のばあい」には銀が、よりすぐれた尺度でありうる、と言っている (cf., WN., pp.35~7, p.198)。

8) 「それを生産するために常に同一の骨折りと労働を要するような商品だけが不変である。私たちはそのような商品を知らない。しかし、私たちはあたかもそれを知っているかのように、それについて仮説的に議論したり話したりはできる。そして、これまで採用されてきた標準のすべての絶対的な不適応性を明確に示すことによって、その科学についての私たちの知識を改善できるかも知れない。」(I.p.275)

スラッファはこの箇所に注を付けて、「不変の価値尺度についてのこれらの考察は、『原理』第1章で導入された変更に合わせて第3版では変更されるべきであった」(I.p.275)と述べている。そしてその論拠として、第3版における第1章第1節の書き換え (I.pp.17~20) と第3版で新設された第1章第6節の叙述 (I.pp.43~47) を指摘し、“不変の価値尺度”の「実際の困難」と言っていた初・2版段階のリカードの認識が、第3版では固定資本の構成割合による価値修正問題によって、「そのような不変の商品を想像することさえ困難であるという感覚の増大」へと理論上の進展を遂げていったと主張する (cf., I.p.xli)。このようにスラッファは、「不変の商品」の非実在性への「感覚」という点で『原理』初・2版と第3版との間に“断絶”を主張するのだが、本稿が示したように、第20章が初・2版以来一貫してスミス穀物尺度論批判を通じての不変の価値尺度の本質的な非存在性を主張していたことに留意すれば、スラッファの主張に俄に同意を与えることはできないだろう。

はすべての物に対して支払われる最初の価格、本源的購買貨幣であった」(WN.,p.30)という定義に代わって、「富の価値は、それを所有し、それを何か新しい生産物と交換したい人々にとって、それが彼らに購買し支配できるようにさせる労働の量にまさに等しい」(WN.,pp.30~1)という定義が現れてくることになる。リカードウは“穀物尺度論”による「労働」概念の旋回に、スミスにおける“富と価値の混同”を見るのである。¹⁰⁾

とはいえ富と価値の概念的区別は、ローダーデイルの“稀少性”の議論とも違う。一般に日常語では、「稀少 scarcity によって商品の価値は引き上げられる」(I.p.276)から、「豊富」でなく「稀少」が価値増大の原因であり、富と価値は背馳するかに見える。だからしばしば、「諸商品の量の減少によって、つまり人間生活の必需品・便益品・享楽品の量の減少によって、富が増加させられうると主張されてきた」(I.p.276)。だが簡単に分かるように、このことはすべての商品について妥当するわけではない。販売者のプラスは購買者のマイナスであり、一国の富全体が「稀少」になるわけではないからである。各人の富が引き出される「一般的ストック general stock」(I.p.276)が不変のままに止まるならば、「富の分配」が変更されるだけである。「稀少性」とは、言うまでもなく「相対的」な概念なのである。逆に、例えば、もし「富の異なる分配だけでなく富の実際の損失もまた生じる」(I.p.277)ような「富の生産」に関わる「稀少」が生じてしまうならば、富と価値は同一方向に動くことになり、背馳の仮象そのものが消滅することになるだろう。だからセイが批判したように、ローダーデイルが言う「一般的富の原理」と「諸個人の富の原理」の矛盾などもともと存在しないのである。¹¹⁾

矛盾は、労働生産性の変動に伴って「富」と「富の価値」の間に現れてくるだろう。例えば、改良された機械によって製造される靴下が2倍になれば、靴下の交換価値は半減するがその国の富は製造靴下の増加によって増大し、さらに、もし改良された機械が他部面でも採用され一国の労働生産性が全般的に2倍になるならば、「その国で年々生産される商品量は2倍になり、それゆえその国の富は2倍になるだろうが、しかしこの富は価値において増加してはいないだろう」(I.p.277)。このことは、同

9) 「労働および諸商品の真の価格は、アダム・スミスの名目的尺度である金銀でのそれらの価格によっては確定されえないのと同様に、彼の真の尺度である財貨[穀物]でのそれらの価格によっても確定されえない。労働者は、彼の賃金が多量の労働生産物を購買する時にのみ、彼の労働に対して真に高い価格を支払われているのである。」(I.p.275)

10) リカードウは、セイにおいてもまたスミスと同様の“穀物尺度論”の採用が認められることを、『経済学概論』(第2版)第一篇第11章の一節を引用し注記している(I.p.275, cf., Say, ed.2, tom.1, p.108)。

11) ローダーデイルは「一般的富の原理」と「諸個人の富の原理」の矛盾という概念を使って、「資本蓄積」が国富にとってマイナスであると主張した。すなわち、社会の資源を減少させ消費を減じる資本の蓄積は、一財貨の欠乏がその財貨の所有者の個人的資源を増大させる原動力であり諸個人にとっては有利だとはいえ、国富にとっては不利なものであり産業を奨励するものとはならない、と述べたのであった。これに対してセイは、「公的富」と「私的富」の矛盾についてのローダーデイルの形式論の誤謬を指摘するとともに、“生産的消費論”を展開し、資本は必ずしも消費を害するものでなく、「再生産的に reproductivment」消費されることによって購買を一回限りでなく永久に繰り返す手段を与える、と反駁したのであった(cf., Say, ed.2, tom.2, pp.38~9)。セイのこのローダーデイル批判は、『概論』(第2版)第二篇第4章「価格の真の変動、相対的変動、名目的変動」で展開されている。同章は『概論』第4版では第3章「価格の真の変動と相対的変動」、第5版では第2章「価格の相対的変動と真の変動」と位置とタイトルおよび内容を変更しているが、ローダーデイル(およびデュボン)に関する部分はほとんど書き換えられていない(cf., Say, ed.2, tom.2, pp.28~41, ed.4, tom.2, pp.36~49, ed.5, tom.2, pp.179~194)。この論点のセイにおける一貫的な重要性を物語るものであろう。

一の価値でも異なる量の富を生産する、あるいは同一量の富を生産する異なる価値を有する2つの国が存在しうることを示唆している。¹²⁾ また、例えば金銀とビロードの生産性が増進しそれらの価値が半減すれば、金銀製食器とビロードを以前の2倍獲得することができるだろうが、しかし、「ビロードと食器の交換価値が低下するので、彼らは一日の労働を購買するために、この種の富のより多くをそれに応じて手放さなければならないから」「この追加的食器やビロードの所持でもって彼らが以前よりも多くの労働を雇用できるわけではない」から、「富は彼らが購買できる労働量によっては評価されえない」だろう (cf., I.p.278)。だからスミスの、「人は彼が購買できる労働量に応じて豊かだったり貧しかったりするにちがいない」(I.pp.277~8)という命題は正当ではありえないのである。

リカードウは、「穀物尺度論」によってスミスの「資本」概念はきわめて限局させられる、と見ている。スミスにおいては、「富」の本源である「労働」を動員する社会的諸力が「資本」としてでなく「穀物」として限定的にとらえられるからである。スミスが「資本」の増大について、富の支出方向を不生産的労働から生産的労働に転換させる「資本の節約」としてのみ語っていることが想起される (cf., WN., p.321)。これに対してリカードウは、一国の「富」は、「収入のより大きな部分を生産的労働の維持に使用すること」によってだけでなく、「同一量の労働をより生産的にすること」によっても増大される、と主張する。¹³⁾ スミスが「資本の増大」を問題設定したのに対して、リカードウが「富の増大」を問うていることに注目しよう。リカードウは、「資本は、将来の生産のために使用される一国の富の一部であり、富と同じ方法で増加されうるものである」(I.p.279)と言い、こうして、富を増大させる労働生産性の増進は資本を増大させ、この増大した資本が富を再び増大させるという、富と資本の言わば相互増殖的な“増大する富”の循環の中で、将来の「富の生産」に向かって「労働」を動員する「資本」および「富」の増大を語ったのである。¹⁴⁾

スミスの「富」の把握では、「富」を生産する「労働」は「穀物」と直結され、「社会状態」から切り離された言わば裸の「労働」に還元されてしまっている。この限りでは、スミスもローダーデイルとともに「富の生産」の次元を欠落させていると言わなければならないのである。ではセイはどうか。第20章の後半部分は、セイにおけるこの「富の生産」の次元を剔出しようとするリカードウの試みと読むことができる。

12) 「そうだとすれば、あらゆる生活必需品・安楽品のまさに同一量を所持する2つの国について、両国は等しく豊かであるとは言えるだろうが、両国それぞれの富の価値は、富が生産される比較的難易に依存するだろう。」(I.p.277)

13) 「これまで述べてきたところから、一国の富は2つの方法で増加されうるということが分かるだろう。すなわち、それは収入のより大きな部分を生産的労働の維持に使用することによって増加されうるものであり、この方法は、商品大量の量だけでなく価値をも増加させるだろう。あるいはまたそれは、追加的な労働量を使用することなしに、同一量の労働をより生産的にすることによって増加されうるものであり、この方法は、諸商品の豊富を増加させるけれども価値を増加させはしないだろう。」(I.p.278)

14) 「追加的資本は、それが熟練や機械の改善から獲得されようが、より多くの収入を再生産的に用いることから獲得されようが、将来の生産において等しく有効だろう。というのは、富は常に生産された商品の量に依存するのであって、生産に使用された用具が入手された際の容易さとは何の関係もないからである。」(I.p.279)

(三)

『原理』第20章の後半部分は、第3版で大幅に書き換えられている。初・2版にあった最初の3つのパラグラフは5つのパラグラフに全面的に差し替えられ、また初・2版の最後の2つのパラグラフは、最後から3番目のパラグラフの後半3分の2とともに完全に削除されている。要するに、初・2版の8つのパラグラフのうち、痕跡をとどめるのは2つのパラグラフのみなのである。本項では、主として第3版によりつつこの後半部分を概観する。初・2版との対比的検討は(五)でおこなわれる。

まずリカードウは、セイは富と価値の定義において「自己矛盾 inconsistent with himself」に陥らざるをえないだろう、と言っている。それはセイが、「それゆえ所得の価値は、どのような方法によるかにかかわらず、もしそれがより大きな量の生産物を獲得できるならば増大する」(I.p.280)と述べて、¹⁵⁾「価値」を交換によって獲得できる他商品の量によっても規定しているからである。例えば、毛織物の価値は生産上の困難によって増大するが、セイの定義に従えば、他商品の生産上の困難が軽減され毛織物と交換に獲得できる他商品の分量が増大するばあいにも、毛織物には何ら生産上の困難が増大しなかったにもかかわらず、毛織物の価値は増大することになってしまう。セイは富と価値を「同義的な synonymous」ものと考えており、そのために富と価値に関する定義では「奇妙にも不首尾 singularly unfortunate であったように思われる」(I.p.279)、とリカードウは論難するのである。

リカードウのセイ批判は、このようにその「価値」概念の曖昧さに向けられていると言えるだろう。そのことを明確に示すために、リカードウは、セイの規定のうち賛成できるものと賛成できないものの対照表を作成する。セイからの引用はすべて『概論』(第4版)からとられ、左欄に同意できるもの4項目、右欄に同意できないもの8項目が、それぞれ1~4、および5~12の通し番号を付して列挙されている。左欄には価値は生産費によって規定されるという定義が、右欄には価値は獲得できる生産物量によって規定されるという定義が集められている。¹⁶⁾

この対照表でリカードウは、セイにおける「生産費」による価値規定と「効用」による価値規定の混在を示そうとしている。そして、例えば金の価値が鉄の価値の2,000倍であることは金の効用が鉄の効用の2,000倍であることを証明しないように、効用は価値を規定しない、と述べる。¹⁷⁾「効用」は「富」に関わる概念であり、「富」と「価値」が区別されるならば、「効用」は「価値」を規定しないと考えるべきで

15) セイの原文は、『概論』巻末の「梗概 Épitome」中の「収入 Revenu」項の注にある。見られるように、厳密に言えばリカードウの引用文は多少変更されている。

「それゆえ収入の価値は、どのような方法(直接的生産か交換)によるかにかかわらず、収入がより大きな量の生産物を獲得すればするほどかなりのものに considérable なる。」(Say, ed.4, tom.2, p.497)

16) 『概論』(第4版)からの引用は、巻末の「梗概」の諸項(「生産的用途」「高価；良価」「物の価値」「所得」「交換」「生産；生産する」「生産物」「富」「効用」と、第一篇第1章、第二篇第1章からとられている(cf., Say, ed.4, tom.2, p.504, p.457, p.505, pp.507~8, p.497, tom.1, p.4, tom.2, p.466, p.487, p.490, pp.502~3, p.506, p.4)。引用は、強調符の省略(2,3,4,5,8,9,10,11,12)や、翻訳上の若干のニュアンスの相違も確認できるが(1,2,5,7,9,6)、ほぼ正確におこなわれている。

17) この鉄と金の効用の事例は、リカードウとセイの交信においてたびたび取り上げられている。1815年のリカードウのセイ宛書簡(107)、1821年のセイの書簡(446)および1822年のセイ宛書簡(488)参照。

あろう。では「価値」は何によって規定されるか。この点でセイが、「相異なる諸商品の価値を規定するのは、『生産された物の価値と生産費とを比較することに絶えず従事している』生産者の競争である」(I.p.283)と述べたことは正当である。¹⁸⁾ 生産物の「価値」は、「価値」と「生産費」を「比較」して「競争」する「生産者」によって規定されるのであり、そこにおいて「生産費」は、生産活動の最低ラインとして「生産物の価値」を規定するのである。リカードウは、恐らくセイの「企業家」概念を想起しつつ、将来の生産に向かって活動する「生産者の競争 *competition of the producers*」によって、つまり「資本」を媒介として、生産物の「価値」を主体的に規定しようとしている。¹⁹⁾

対照表によるセイの“価値論”批判に続いて、リカードウはセイの“地代論”を批判する。要するにこうである。セイは「生産的用途」の中に資本・労働だけでなく土地をも含ませているが、自分は地代は「部分的独占」の結果であり、価格の結果であって原因ではないと考えるから、生産費を規定する「生産的用途」の中には「土地」を含めない、そのことは、土地生産において、「剰余生産物」が利潤のみを支払い地代を支払えない「一部分」が常に存在していることから明らかだろう。²⁰⁾ 周知の“差額地代論”を想起すれば、叙上の議論は容易に理解できるだろう。リカードウは、単なる自然力としての土地でなく「土地所有」が「地代」をもたらすことをセイとともに肯定するが、所有された「土地」は部分的にのみ価値形成に参加する、と言うのである。

続いてリカードウは、結局自分のセイ批判は、価値をそれと交換される他の商品分量によって尺度

18) この引用は『概論』『梗概』中の「物の価値 *Valeur des Choses*」項からとられている。リカードウは、対照表の第4項目に長文にわたってこれを引用しているが、引用文には若干のリカードウによる読み換えも確認できるので、以下にセイの原文を(変更箇所アンダーラインを付して)示しておくことにする。尚、セイはこの当該箇所を『概論』第5版では大幅に書き変えてしまう(*cf.*, Say, ed.5, tom.3, pp.328~9)。

「それゆえ、物の価値には二つの基礎がある。すなわち、(1)つくられた需要を決定する効用(第一篇第3章・第二篇第5章)、(2)その需要の範囲を制限するその生産の費用(第二篇第10章)、である。その効用がその価値を生産費の水準にまで高騰させないときには、その物を用費するに値しない。それは、生産的用途がもっと高い価値のものを創造するために使用されえたかもしれない、ということの証拠である。生産元本の所有者、すなわち勤労能力・資本・土地を自由にしうる人々は、それゆえ、生産費を生産物価値と比較することに、あるいは(同じことになるが)、互いに生産物価値を比較することに、永続的に専心している。というのは、生産費とは、生産物を与えるために消費される生産的用途の価値以外の何物でもないからである。また、生産的用途の価値とは、それが生み出す生産物の価値以外の何物でもないからである。生産物の価値、生産的用途の価値、生産費の価値は、それゆえ、事物が自然的コースに委ねられているときには、常に同類の価値 *valeurs pareilles* なのである。」(Say, ed.4, tom.2, pp.507~8)

19) セイにはもちろん「企業家 *entrepreneur*」という概念があるが、「生産者の競争 *concurrence des producteurs*」という概念もまた存在している。例えば『概論』『梗概』中の「生産物 *Produit*」項では、「生産者の競争は彼らの生産物を原価で与えることを余儀なくさせる(生産者にとっての原価は生産費であり、それは彼自身の産業の利潤を含んでいる)」(Say, ed.4, tom.2, p.490)と述べられている。同様の概念内容は、「生産費 *Frais de Production*」項にも認められる(*cf.*, *ibid.*, p.474)。とはいえこの概念は、第2版に比べて第4版では後退している印象を受ける。例えば、『概論』第2版(第二篇第1章)の「生産者の競争は、通常、諸物の価格をその生産費の水準にまで低下させる」(Say, ed.2, tom.2, p.5)という一句は、第二篇第1~5章の第4版における全面的書き換えに伴って「生産者の競争」という語とともに消えている(*cf.*, Say, ed.4, tom.2, pp.9~10, p.33)。

20) 「私は常に地代を部分的独占 *partial monopoly* の結果と考えており、決して真に価格を規制せず、むしろ価格の結果と考えている。もし地主によってすべての地代が辞退されても土地で生産される商品は何ら安価にはならない、なぜならば、土地で生産されるこの同じ商品の中には、剰余生産物 *surplus produce* がただ資本の利潤を支払うのに十分なだけであるため、地代が存在せず支払われえないような一部分が常に存在しているからである。」(I.p.284)

することに向けられている、と述べている。²¹⁾ セイ批判は、「価値」の「交換価値」との同等視批判なのである。そして、デステュット・ド・トラシを援用し、価値の相対的規定でなく、「労働」という共通の実体による尺度、という視座を対置する。²²⁾ 要するに、セイが「効用」概念によって「価値」を「交換価値」に横滑りさせるのに対して、リカードウは「富」を本源的にもたらす「労働」の次元を再び設定することの重要性を強調するのである。そのことは第20章の冒頭で定義された、「生産の難易」によって規定される「価値」がもつ、「富」との不即不離の相関関係を想起させることでもあった。全面的に書き換えられた第3版の5つのパラグラフはここで終わる。

この後『原理』第3版では、3つのパラグラフが続いている。すでに述べたように、『原理』初・2版ではここに5つのパラグラフが続いていたのだが、第3版では後ろの2つ余りのパラグラフがカットされたのである。

この末尾3つのパラグラフでリカードウは、スミスの「自然力」論を評価し、スミス为非難するセイを批判している。すなわち、セイが、「スミスは価値を生産する力を人間の労働だけに帰し」、「価値」は「自然が供給する動因の作用と資本の作用とが結びついた人間の勤労に負っている」という「原理」を知らなかったために、「富の生産における機械の影響についての真の理論を確立することを妨げられた」、と述べている一節が引用される(*cf.*, I.p.285).²³⁾ このセイの批判が、スミスにおいては「労働」が「社会状態」から切り離された単なる「労働」に還元されるという主旨であるならば、リカードウもこれに同意を与えたと思われる。だが、太陽・空気・気圧のような自然的動因もまた人間と協力して生産物の「価値」を増加させることをスミスは見落としているとセイが言うのだとしたら、それはスミスの誤読であるし、何よりもセイにおける「富」と「価値」の混同を示すものであるから、リカードウはこれには賛成できない。ここには、「自然力」をめぐってのスミス、セイ、リカードウの「価値」概念の鼎立状態を確認することができるだろう。

21) 「結論を言えば、諸商品の真の豊富と安価から生ずる全消費者階級への有利さを高く評価する点で、私は誰にも遅れを取るわけではないが、セイ氏が商品価値を、それが交換される他の諸商品の豊富さによって評価することには同意できない。」(I.p.284)

22) トラシの議論をリカードウは、次のように肯定的に援用している。すなわちトラシは、「ある物を測定することは、私たちが比較の標準とみなした同一物の確定量と比較することである」(I.p.284)と言い、「もしフラン金貨と測定されるべき物とが、両者に共通なある他の尺度に関連づけられえないならば、1フランはフラン金貨が造られるのと同じ金属の量に対する以外には、いかなる物に対する価値の尺度でもない」(I.p.284)、と喝破した。だから、商品Aと金との共通の尺度が見いだされねばならぬわけだが、トラシは、「私はこのことはできると思う。それらはともに労働の成果だからである。それゆえ労働は、それらの相対的価値だけでなく真の価値をも評価しうる共通の尺度である」(I.p.284)と言って、「労働は私たちの唯一の本源的財宝であり」、「すべての物はそれを創造した労働を代表するにすぎない」(I.p.285)と述べた。“尺度論”における「労働」の“本源性”を主張した点で、リカードウはトラシを高く評価するのである。とはいえ、「だが彼が、『価値』『富』『効用』という用語にセイが与えた定義を支持していることを付記せねばならぬのは残念である」(I.p.285)と、トラシもまたセイの理論的影響下にあることを注記している。

23) 対応する『概論』『序論』の一節は以下のようなものである。リカードウはほぼ正確に引用していると言ってよいだろう。「彼は価値を生産する力を人間の労働だけに帰する。より正確な分析の示すところでは、……それらの価値は労働の作用による、というよりもむしろ、自然が供給する動因の作用および資本の作用とを結合された人間の勤労によっている。……この原理を知らなかったことが、彼を、富の生産に関連する真の機械の理論を確立することから妨げた。」(Say, ed.2, tom.1, préliminaire, pp.li~lii)

セイは、「自然力」を勤労・資本と結合し利用する者こそ「価値の実際の創造者である」と言い、「冶金技術」の例によって、「自然力」が「価値」を生むことを主張している。²⁴⁾ リカードウからすれば明らかな謬論である。だからセイがスミスを批判して、スミスは自然力を無視して富を「蓄積された労働」とのみ誤って考え、この誤った第一の「結論」から労働を唯一の「富の尺度」「価値の尺度」であるとする第二の誤った「結論」をひき出した、と述べたのに対して、誤った「推断」はセイのものであってスミスのものではないと、リカードウはセイを批判したのである(*cf.*, I.p.286)。²⁵⁾ そして、10人の労働が節約できる挽臼の発明を例にとり、挽臼によって社会もより豊かになり小麦粉の「価値」も上昇する、と述べるセイについて、「セイ氏は使用価値と交換価値の間にある差異を絶えず見落としている」(I.p.286)と論評する。

第3版の最後のパラグラフは、初・2版の後ろから3つ目のパラグラフの内、第3版での削除を免れた前半3分の1の部分である。叙述内容は、スミスにおける富と価値の区別の評価である。すなわち、スミスは「富」と「価値」を区別しており、機械や自然の動因は「富」を増大させるが「価値」を増大させないと考えるから、自然的動因はむしろしっかりと理論の射程に入っている、とリカードウは言うのである。²⁶⁾ 『原理』(第3版)の第20章はこのスミス評価で終わっている。初・2版ではこの後にセイの『概

24) 「金属を火で溶かすことを知った初めての人は、この過程が溶けた金属に付加する価値の実際の創造者ではない。

その価値は、その過程を利用した人の勤労と資本に付加された火の物理的作用の結果である。」(Say, ed.2, tom.1, p.31)

リカードウは、『概論』(第2版)第一篇第4章のこの箇所をほぼ正確に引用している(I.p.285~6)。興味深いのは、この一節のアンダーラインを付した「価値」という言葉を、セイが第4版(第一篇第4章)では「効用」という言葉に変更していることである(Say, ed.4, tom.1, p.32, *cf.*, Say, ed.5, tom.1, p.39)。この限りでは、セイは自然力が「価値」を生むという見解を修正したように見える。だがセイは、上の引用文のすぐ後の、「生産された価値は勤労・資本・自然的動因の作用と協力によるものである」(Say, ed.2, tom.1, pp.32~3)という、自然的動因が「価値」を生み出すとやはり述べている一句については、第4版でも変更していない(*cf.*, Say, ed.4, tom.1, pp.33~4)。これらの経緯を見ると、セイはリカードウの批判を容れながらも、「価値」と「効用」という概念の区別についてはあまり神経を尖らせておらず、したがって両語をほとんど同義的に用いていたとも推測される。リカードウが批判する所以である。

25) 少々微細にわたる感はあるが、ここでセイがスミスを批判した『概論』(第2版)第一篇第4章の一節を、リカードウの引用文とともに以下に対照表示しておこう。

「この誤謬からスミスは、あらゆる生産物の価値は人間の最近ないし昔の労働を代表する、別言すれば、富は蓄積された労働に他ならないという誤った結論 *conséquence* をひき出している。またこの誤謬から、労働は富あるいは生産物価値の唯一の尺度である、という第二のまったく同様に誤った結論 *conséquence* に至っている。」(Say, ed.2, tom.1, pp.31~2)

「『この誤謬からスミスは、すべての生産物の価値は人間の最近あるいは以前の労働を代表する、別言すれば、富は蓄積された労働に他ならないという誤った結論 *result* をひき出した。またこの誤謬から、第二の推論 *consequence* によって、労働は富の唯一の尺度である、あるいは生産物の価値の唯一の尺度である、という誤った結論 *result* をひき出した』。セイ氏が結論する推断 *inferences* は、彼自身のものであってスミス博士のものではない。」(I.p.286)

見られるように、リカードウの引用文はセイのものとは微妙に異なっている。セイの原文では、スミスは自然力は何らの価値も生み出さないという「誤謬」から「富は蓄積された労働である」および「労働は唯一の価値尺度である」という2つの「誤った推論 *conséquence*」をひき出した、と述べられているのに対して、リカードウの引用文では、2つの「誤った結論 *result*」の間に「第二の推論 *consequence*」というセイの原文にはない一句が挿入され、「労働=富の源泉論」が「第二の推論」によって“労働=富の尺度論”および“労働=価値の尺度論”を導出したかのように叙述されているからである。このリカードウによる改変は、セイとスミスに対するリカードウの批判の視角の差異を表して興味深い。スミスの問題は“穀物尺度論”による“価値の尺度”の“富の尺度”への横滑りにあるのであって、“源泉論”の“尺度論”への横滑りはセイ自身のものではないのか、とリカードウは言いたいのである。

26) 「アダム・スミスは、これらの自然的動因や機械が私たちのためになす利益をどこでも過小評価しているのではなく、彼はそれらが諸商品に付加する価値の本性を正当に見極めているのである。」(I.p.287)

論』からの引用が続き、さらにセイの『経済学問答』からの引用も含む2つのパラグラフが続いている。これらカットされた部分の検討は(五)でおこなうことにしよう。

(四)

『原理』第20章の第3版(1821年)での書き変えの理由としては、セイの『概論』第4版(1819年)での大幅な改訂が指摘されうるだろう。²⁷⁾ セイは『概論』第4版を1819年10月にリカードウに献本しているから(347)、リカードウがこれを新たな底本として第20章のセイに関する記述を書き変えた、という推測は当然成立しうる。ところが実際はそうではなくて、すでに『概論』第4版に先立つ『原理』第2版改訂作業時(1818年)に、リカードウはミルに書き変えの意思を漏らしている(296)。²⁸⁾ また少し丹念にリカードウの「書簡」を読んでみると、セイとの論争は実は1814年の初会見以来のものであり、改訂の理由もこの一連の経緯を踏まえないと理解できない、ということが分かってくる。そこで本項では、ひとまず『原理』そのものから離れて、リカードウとセイの「書簡」に見られる論争の足跡を辿ってみることにしたい。²⁹⁾

ところで『リカードウ全集』には、リカードウとセイが交わした18通(内1通は不出)の書簡が載録されている。このうち以下の9通は、リカードウの批判に対してセイが答えるというかたちでのかなり長文の往復書簡になっている。すなわち、①1815年8、9月(107、117)、②1820年1、3、8月(352、356、393)、③1821年5、7月(430、446)、④1822年3、5月(488、496)の諸書簡である。これらは、『原

27) セイは『経済学概論』を各版ごとに大幅に改訂している。初版(1803年)と第2版(1814年)の間では、篇章構成が5篇112章から3篇42章へ全面的に組み替えられ、巻末「索引」の除去と各章の「一般的要約 Table Analytique Générale」および「梗概」の新設、「序論」の2倍近い叙述の拡大、「所有について」章の「収入」篇から「富の生産」篇への移動、「販路について」章の4倍以上への拡張、第2篇第1～5章の組み替えと書き換え、第2篇末の「人口論」章の新設、等の文字どおり大改訂がおこなわれている。第3版(1817年)では、若干の著者への新たな言及がおこなわれる以外には目立った変更はないが、セイはリカードウ宛書簡(221)で第2篇第1章と「梗概」で修正をおこなったと書き送っている。本稿の主題に関連する第4版(1819年)では、第2篇「富の分配について」第1～5章の大幅な組み替えと書き換えの他、多大な増補・改訂が「序論」、第1篇第7、10、15、17、21章、第三篇第2、3、6、8章でおこなわれた。セイの最終編集版である第5版(1826年)では、各章「要約」の除去と巻末「索引」の復活、「序論」「販路章」「貨幣章」の章配置・タイトルでのいくつかの小さくない変更がおこなわれた。これら諸版のうち、リカードウは第2版、第3版、第4版を読んでいるが(70、226、352、379)、初版を読んだという記録はない。尚、『概論』における各版の改訂箇所については、増井幸雄『「経済学」解題』(『ジャン・バティスト・セイ 経済学』上・下、岩波書店、1926・1929年) VI～Ⅹ頁も参照されたい。

28) 1818年12月22日付のミル宛書簡(296)でリカードウは、『原理』仏訳書に付されたセイの「注」を、その時印刷中であった『原理』第2版に「付録」として載録することの可否を問い合わせている(VII.p.371)。この仏訳版『原理』は、原著者であるリカードウの手元には送られて来ず、リカードウはセイが「注」を送付してこなかったのは「友好的」でも「公正」でもない、とミルに不満を漏らしている(292)。セイが、税関の事情等、不送付の理由を書き送ったのは、やっと翌1819年10月10日付の書簡においてであり(347)、リカードウはそれに先立って『原理』出版者のマリを通じてこの「注」を入手し読むのであった(292、296)。ミルは上述したリカードウからの相談に対して、1818年12月24日付の書簡(297)で、セイの無理解を批判しつつも、「何らの注目にも値しないもの」との助言をおこなった(VII.p.375)。リカードウはこれを容れて4日後の12月28日のミル宛書簡(298)では、「注を翻訳して著作の終わりに加えることに関してはマリ意向に委ねました」(VII.p.379)と思い直し、こうして『原理』第2版での改訂は表に出ることはなかったのである。とはいえこれ以後もリカードウのセイへの批判は、ミルやマカアロクへの書簡で吐露されている(cf.300、302、321)。

29) リカードウのセイ関連の書簡の「一覧」については、前掲拙稿(2003年)を参照されたい。

理』初版以前(①)、『原理』第2版刊行後(②)、『原理』第3版出版直後(③)、リカードウの二度目の大陸旅行の直前(④)に属するもので、それぞれがリカードウ理論の展開の節目に位置していると言えるものである。いずれも濃密な内容をもっているが、本項ではこれらのうち、『原理』第3版出版以前の6通の書簡(107、117、352、356、393、430)を、第20章書き変えの経緯にも注意しながら検討することにした。³⁰⁾

1815年の2通の書簡(107、117)は、両者の実質的に最初の論争である。同年8月18日付の書簡(107)でリカードウは、前便(106)でセイから送付された『経済学問答』へのコメントをおこなっている。論点は、「効用」「富」「資本」である。セイはこれに答えて、同年9月10日付のかなり長文の書簡(117)で反論する。以下、セイのこの返信を中心に論点を概観していこう。尚、このセイの返信には1815年12月2日付の「異文」も存在するので、併せてこれも検討する。³¹⁾

まず第一に「効用」という言葉をめぐって。セイは、自分は「効用は価値の唯一の原因でなく第一の原因である」(VI.p.271)と限定的に言っているものであり、だからリカードウが前便(107)で、あたかもセイが「効用は価値の尺度である」(VI.p.273)と言っているかのように批判するのは当たらない、と反論する。同時にセイは「生産費」についても、「何の用途もない物は全然需要されず、人はそれに決して価格をつけず、決して価値をもたないだろう」(VI.p.271)から、「生産費」(「あなたが言うところの『生産の困難』」)は、「物の効用が人々にその物に付与させる価格」(VI.p.271)の最低限を画するものではあるが、価格の「第一の原因」ではない、とも付言している。セイが「効用」という言葉を、単に富の「使用価値」の意味だけでなく“需要者”が付与する付け値(価値)の意味でも使っており、その語義の一方的な拡張のためにリカードウとの間に摩擦が生じていることが読み取れるだろう。³²⁾

30) リカードウとセイの交友関係はセイの訪問(1814年12月)以来リカードウの死(1823年9月)に至るまで続くが、両者の間には何度かの交信途絶期間も確認することができる。すなわち、①1815年9月～1817年6月、②1818年1月～1819年9月、③1822年6月～1823年9月の諸期間である。このうち①と③は、2度の大陸旅行(1817年6～7月、1822年7～12月)の際の会見を斟酌して多少割り引いて評価されねばならぬだろう。しかし②については、本論でも明らかにするように、この後も『原理』第3版刊行(1821年5月)に至るまでのリカードウの書簡がわずか1通のみ(1820年1月付)であることを勘案すると、実質的には3年以上に及ぶ1818年1月～1821年4月の途絶期間と考えることもできる。本項では、最初の途絶期間(①)に接続していく1815年の書簡(107、117)、まさに『原理』第20章改訂時の2度目の途絶期間中(②)の書簡(352、356、393)、そして『原理』第3版刊行通知の書簡(430)を祖上に上せ、改訂の背景が検討されるわけである。

31) スラッフアによればこの「異文」は、セイが9月10日付の前便(117)を投函し忘れたと勘違いして書いたが投函されなかったもの、と推測されている(*cf.* VI.p.273)。記述内容は9月10日付の書簡とほぼ同じであり、全体としてトーン・ダウンが目立つが独自の概念提示もおこなわれている。

32) セイの「効用」概念は、『概論』の改訂とともに“需要者にとっての効用”という意味合いを次第に強めていったように思われる。すなわち、『概論』各版「梗概」中の「効用 *Utilité*」項を見ると、「経済学における効用とは物がもつ人に役立つ能力である」という定義は第2版以降の全版に共通しているが、第4版では、人が物に付ける「価格」は「効用の尺度」であり「満足の尺度」であるから、「効用は生産物に対する需要の基礎でありしたがって価値の基礎である」という規定が加えられ、さらに第5版では、もし獲得するための「価値」が高すぎるならば需要者である「企業家」は自らこれを製造する途を選ぶだろうから、「価値は生産費以上に上がることはない」という一文がつけ加わる(*cf.* Say, ed.2, tom.2, p.477, ed.4, tom.2, pp.506～7, ed.5, tom.3, pp.527～8)。供給者にとっての「効用」から、「企業家」(需要者)が、購買者にとっての「価値」である「効用」と販売者にとっての「価値」である「生産費」を見比べながら「交換」し「生産」する「効用」の定義へと、次第に変換していったことが確認されよう。この需要者(生産者)からする「効用」の定義は、「梗概」中の「生産費」項での、「生産は、人が生産された効用を受け取るために生産的用途(生産費はその評価にすぎない)を与える交換として考察されうる」(Say, ed.4, tom.2, p.475, *cf.*, ed.2, tom.2, p.454, ed.5, tom.3, pp.292～3)という「生産」の定義にも照応するものである。

第二に、「富」という言葉をめぐって。リカードは、「富」とは「ただ私たちに享樂を獲得させることができるだけで価値あるものであるが、「富んだ人」とは「生産が困難な諸物を獲得できる人」、つまり価値物を持つ人のことであり、だからセイが『問答』の中で「人はたとえ価値あるものをほとんど持っていないなくても、消費したい物を容易にあるいはただで獲得できるならば最高度に豊かである」(VI.p.248)と、あたかも「欲求の節制」によって人が豊かになれるかのように述べているのは間違いだと批判した。これに対してセイは、自分は、「欲求が節制的であればあるほど富はますます大きい」と言ったのではなくて、「人が持ちたいと欲する物が高価でなければならないほど、富はますます大きい」(VI.p.272)と言いたかったのだ、と反論する。リカードが言う「富」と「富者」の区別とは「富」と「富の価値」の区別のことだが、明らかにセイの反論は焦点を外している。とはいえここでセイが、「欲する物をより安価に *à meilleur marché* 獲得できればより富裕だ」(VI.p.274)と述べて、「富」の「絶対的」変動に言及していることは、「価値」を「生産の困難」に連動させたりリカードの「富」概念とも関連しており注目される。³³⁾

第三に、「資本の価値」の測定をめぐって。リカードは、『問答』でセイが、「製造業者は彼の資本の価値が増大しているかどうかを確かめるためには、彼が所有するすべてのものの財産目録 *inventory* を作って、各商品とその現価格で評価しなければならない」(VI.p.248)と言ったのに対して、これではイングランド銀行券の減価によっても資本価値が増大したことになってしまうと言い、「資本の増大は資本の力、すなわちより多くの勤労を使用しその国の土地と労働の生産物を増していく資本の力によってだけ確かめられうる」(VI.p.249)と批判した。これに対してセイは、「今年の財産を今年の財産と比較するためには」、貨幣のような「ある年と他の年で価値があまり変化しない一商品」によって評価する方が良いのであり、リカードは、スミスが提唱した価値の尺度、つまり変動の大きい「労働の価値」を選択することになっているのではないかと反論した(*cf.*, VI.p.272)。ここでは逆に、「財産の比較」を問題にするセイに対して、「資本の増大」はより多くの「勤労」を動員する「資本の力」によって「評価」されると説くリカードが見いだされる。尚、「異文」ではセイは、紙幣減価を考慮すべしというリカードの指摘は正当であると完全に譲歩している(*cf.*, VI.p.274)。

この1815年8～9月の書簡の後、リカードとセイの交信はリカードの大陸旅行(1817年6～7月)まで2年近くにわたって途絶える。その間リカードは、セイの『経済学概論』第2版と『経済学問答』第1巻をもとにして、セイをスミスと並ぶ主要な批判対象とした『原理』初版を1817年4月に刊行する。

33) 「異文」においてセイは、「生産費という困難がほんのわずかなものあるいは無に帰する」ことによる絶対的な「安価」に言及し、この「仮定」は行き過ぎだろうが、しかし「絶対的良価 *bon marché absolu* からより多くあるいはより少なく遠ざかったり近づいたりする良価(安価)の様々な程度」(VI.p.274)について述べている。この「絶対的良価」の概念は、言うまでもなくデュボン・ド・ヌムールの「高価 *cherté*」論を念頭に置いたものであり、その批判が展開される『概論』第二篇第3章(第4版)の、商品価格の「真の変動」と「相対的変動」の区別論の問題圏に含まれるものである(*cf.*, Say, ed.2, tom.2, pp.35～6, ed.4, tom.2, pp.44～5)。後にセイは1820年の『マルサス氏への手紙』で、この価格変動の「絶対的な」(Say, ed.4, tom.2, p.33)次元の存在の指摘によって「この科学にいささかの貢献をしたように思われる」、と自らを評価している(*cf.*, IX.pp.170～1)。

同年7月のパリでの会見後、再び両者の交信が始まり、帰国直後のセイからの『概論』第3版の送付(221)、8月のトラワ宛書簡でのリカードウのセイについての「好印象」の記述(226)、12月の馬鈴薯粉投機等の個人的交流(241、243)、翌11月のマカアロクの勧めを容れた改訂中の『原理』第2版「課税章」へのセイの金言の新挿入(284、285)等々、この時期のリカードウのセイとの交信には好意的なものが目立つ。だが前述したように、『原理』仏語訳に付されたセイの「注」の件を契機にこれが一変し、リカードウは1818年12月頃から『原理』でのセイ批判の書き換えを本格的に検討し始める。以後、リカードウの友人に宛てた書簡でもセイについての批判的な記述が目立つようになってくる(cf., 379、394、401、402、428)。セイとの交信も翌1819年10月まで完全に途絶えることになる。

こうした中、セイは1819年10月10日に約2年ぶりの書簡を送る(347)。それは一種の詫び状であり、『概論』第4版の献本とリカードウの批判を容れた同書第二篇での修正の通知に添えて、例の『原理』仏語版の「注」は自分の著述のためのものであり手違いからリカードウに送付できなかった旨の言い訳が述べられている。これに対するリカードウの書簡は3ヶ月後に送られており(352)、その際リカードウは、1年近く前に刊行された『原理』第2版(1819年2月刊)を言わば返礼のかたちでセイにこの時点で献本している。このリカードウの1820年1月の書簡に対してセイは3月に返書(356)を送付するが、これに対してリカードウは返事を書いていない。リカードウの返事がないまま、セイはさらに同年8月10日付の書簡(393)を送付する。これはセイの『マルサス氏への手紙』に添えられたものであるが、郵便事情の遅れからリカードウの手元に届くのは10月14日になる(394)。実はその間、この『マルサス氏への手紙』は英訳されて『ニュー・マンスリー・マガジン』に1820年9月号から数回掲載され(cf., VIII.p.249)、リカードウもこれを9月には別途入手し(378、379)、友人たちと活発に議論していた(379、384、387、388、390、391、392、394、395、401)。そのような中、10月14日に遅れて届けられた『マルサス氏への手紙』に添えられた先述した1820年8月10日付のセイの書簡(393)が、リカードウに『原理』第20章の改訂を決意させることになる。次に、このリカードウの1820年1月11日付のセイ宛書簡(352)、セイの1820年3月2日付のリカードウ宛書簡(356)、およびセイの8月10日付のリカードウ宛書簡(393)を吟味する。

まず前二者(352、356)について見よう。論点は“価値論”と“地代論”である。すなわちリカードウは、「価値」を規定するものは「労働の価値」ではなく「労働の相対的な量」であるという有名な命題を提示している。³⁴⁾ また“地代論”については、『原理』仏語版「注」でのセイのリカードウ批判は無地代資本への言及を欠いていると反論する(cf., VIII.pp.149~150)。これに対してセイは、リカードウの「価値」についての規定も「無地代資本」についての指摘もよく理解ができないう上、前者に対しては、「労働を獲得するために支払う価格」だけが「労働の量と質を決定できる」のではないのか、また

34) 「私は、諸商品の価値を規制するのは労働の価値であるとは言っていません。というのは、それは私が全力で打倒しようとしている意見だからです。そうではなく、諸商品の相対的価値を規制するのは諸商品の生産に必要な労働の比較的な量である、と私は言うのです。」(VIII.p.149)

後者に対しては、自分は、フィジオクラートのように土地への租税を地代に帰着させるのではなく、租税は生産費の増加によって原生産物価格を上昇させると考える、とコメントしている(cf., VIII, pp.161~2)。前者はリカードウの「労働」概念との相違を示し、後者はリカードウの見解との一致面を含むと言えるが、「労働」と「価格」についての両者の理論的差異の微妙な表れを読み取ることができよう。

次に1820年8月10日付の書簡(393)について。この短い書簡でセイは、「価値」と「効用」に関する『概論』第4版での見解を開陳し、「価値」とは「交換」において「効用」を獲得・支配する能力であり、「価値」は獲得できる「効用」の量に「比例する」から、「価値と効用の量とは一つの等式の対等な両項」であり、リカードウと自分の違いは「富」の定義を「価値」からおこなうか「効用」からおこなうかの違いだけであり、だから自分の価値学説は「別の用語で述べられたあなたのそれに他ならない」(VIII, p.280)と述べている。³⁵⁾ セイにおいては、「価値」と「効用」は「富」を定義する“秤”の両端としてイメージされているのである。だが「富」は、その一身で「価値」と「効用」を有しているわけではなく、他の「富」と連関するとき、はじめてその「富」は「価値」と「効用」の“統一体”として現れ出るのである。セイの言説は、リカードウから見れば究極の“富と価値の混同論”であり、とうてい承認することはできなかつただろう。

この1820年8月10日付の書簡(393)についてリカードウは後にマカアロクに、この書簡こそ『原理』第20章の書き換えを促した最大の理由であった、と書いている(407)。³⁶⁾ この書簡を入手した10月14日に、リカードウはミルに宛てて早速、セイの見解には同意できない旨の書簡(394)を書き送る(VIII, p.284)。11月には、『マルサス氏への手紙』についての「評注」を書き終えたことを、マルサスやトラワに伝えている(402、403)。³⁷⁾ 1820年12月4日には上記の書簡で、この「評注」をマカアロクに送付し意見を求めている(407)。その際リカードウは、この「評注」とともに『原理』第20章部分の「改訂原稿」もマカアロクに送っていたようで(cf., 417、418)、この2つの原稿を下敷きにして第20章の書き換えはおこなわれたようである。こうして1821年5月に『原理』第3版は出版される。第2版の時とは違って、リカードウはセイにこれを前渡し本として早々に献本している(430)。

『原理』第3版の献本に添えられた1821年5月8日付の書簡(430)では、リカードウの改訂ポイントが“価値論”と“地代論”であることが簡潔に述べられている。まず第一に、「『価値』という言葉に付すべき意味に関して私たちの間に存在する特殊な相違 particular difference」(VIII, p.379)に関して、リカー

35) 「というのは私の学説は、ある物の価値は、この物が交換（支配）においてもっているいくばくかの量の効用を獲得する能力にすぎぬこと、そしてこの価値は、それが獲得できる効用の量に比例していることを容認するからです。それゆえ、価値と効用の量は同じ等式の等しい両項です。だから、あなたと私との間に違いはないのです。富の定義において、あなたはこちらの項から、私はあちらの項から開始しているわけだからです。」(VIII, pp.280~1)

36) 「もしセイの本に添えられた彼の手紙を受けとっていなかったならば、セイについて何事かを言及しようと思ったかどうか分かりません。その手紙が私を、彼の主旨に関する意見を近作の中で表明するように仕向けさせているのです。……／私がロンドンを発つ前にマリ氏は、私の本の新版を近く出版したいと語っていました。セイ氏は、彼の第4版から以前に私が非難した論述の一部を削り、価値についての彼の意見を新しくそして修正したかたちで（と彼は考えている）展開しましたので、私は以前の私の考察を削除し、そこに別の考察を挿入するのが正しいと考えます。これらもまたお送りいたします。」(VIII, p.315)

37) 同時にリカードウは、マルサスの『経済学原理』(1820年4月刊)を評した『マルサス評注』(1820年7月に着手)を、この時期(11月)に完成している(374、400)。

ドウは、セイが「価値」を『富』と同じ意味でそして『効用』と同じ意味で使っている」(Ⅷ.p.379)ことへの再考を促している。第二に、地代の価値形成を容認するセイの“生産的用途論”に関してはほとんど賛成だが、しかし地代は価格の結果だから、商品の「比較価値」を評価する際には地代は排除すべきであることが述べられている。尚、“地代論”に関しては、地代を異にする同価値の2塊のパンの事例が示され、「地代と利潤を規制する諸法則」へのセイの理論的関与が要望されている。³⁸⁾

これに対してセイは、1821年7月19日付のリカード宛書簡を送り(446)、その後の論争には若干の新たな展開が認められる。これについては(六)で検討を加えることにし、次項では、改訂前の初・2版の叙述と第3版との比較をおこなおう。

(五)

すでに述べたように、『原理』第20章のセイを批判した後半部分は第3版で大幅に書き換えられた。本項では初・2版の側から第3版との異同内容を考察する。

初・2版においてもリカードは、第3版と同様、セイの「富」と「価値」の定義上の「不首尾」を批判している。まず、人は「物」そのものを創造することはできず「素材」に有用な形態(「効用」)を与えることができるだけである、というセイの『概論』の一節が援用される。³⁹⁾そして、この「効用」という言葉によってセイの「価値」規定が混乱に陥ることを指摘する。すなわち、「効用」とは他人にとっての有用性であるから、「ある特定の物の効用は、一般的評価に従ってそれと交換される他の諸商品の量によって指し示される」(I.p.280)ことになり、こうして「富」は「効用」を有するがゆえに「価値」を有し、「効用」は「一般的評価」によって、つまりそれと交換に提供される他人の諸商品の「量」によって規定されることになるから、したがってセイにおいては、「価値」という言葉がスミスの「交換価値」という言葉と同義語になってしまう。リカードは、こうセイを批判するのである(cf., I.pp.279~280)。⁴⁰⁾

38) 2つのパン塊の事例はその後の書簡でしばしば言及されるので、ここで一言しておこう。いま2塊のパンがあり、一方は3~4ポンドの地代が支払われる土地からとれ、他方はそれほど多くの地代が支払われない土地からとれるばあい、セイならば、一方のパンでは土地の生産的用途が高く支払われ、他方のパンでは土地の生産的用途が少なく支払われている、と言うだろうが、「その知識 information は有用でなく、私たちの将来的実践をガイドしうる何らの結論 inference にも導きえない」(Ⅷ.p.380)だろう、「私たちが知りたいのは、他のものの価値と比較したパンの価値を規制する一般的法則は何かということであり」、私たちが見いだすのは、無地代資本がすべてのパンの価値を規制することと、「他の物との関係におけるその価値は、その生産に投じられた労働の量と、他の物の生産に投じられた労働の量との比較量に依存する」(Ⅷ.p.380)ということである、こうリカードは主張するのである。

39) 対応するセイの『概論』(第2版)第一篇「富の生産について」第1章「『生産』について理解すべきこと」の一節は以下のようなものである。リカードの抜き書きには、原文との間に若干の相違がある。

「人は物 *objets* を創造しない。世界を構成する素材 *matières* の量は増えも減りもしないだろう。私たちがなしうるのは、これらの素材をある他の形態に再生産すること、つまりそれらがもっていない何かある有用性 *usage* を与えるようなある他の形態に、あるいは単にそれらがもつ効用 *utilité* を増大させるようなある他の形態に、再生産することである。」(Say, ed.2, tom.1, p.3, cf., I.p.280)

40) リカードは、『概論』(第2版)第一篇第1章中の以下の一節を多少手を加えて援用している(cf., I.p.280)。とはいえ『概論』第4版ではセイはこの部分を全面的に書き換えてしまい(cf., Say, ed.4, tom.1, pp.1~6)、それに伴ってリカードの『原理』(第3版)からも姿を消すことになる。

「この評価、つまり社会を構成する人々が相互に自分の便宜を求めておこなう論争の結果であるこの評価は、著名なアダム・スミスが諸物の交換価値と呼び、テュルゴーが諸物の評価価値と名づけ、そして私たちがより簡潔に価値という名前で指示しうるものを形成している。」(Say, ed.2, tom.1, p.4)

セイにおける「価値」と「交換価値」の同一視は、何が問題なのだろうか。『経済学問答』からとられた靴下の事例は、これを明らかにする。例えば改良された機械によって靴下製造の労働生産性が2倍になるとき、1足の靴下の交換価値は半減するが靴下1足の使用価値(効用)は不変だから、「私は以前と同等に豊かなはず」であり、かつ「より少ない価値額をもつはず」である(cf., I.p.280)。このように労働生産力の変動は、「使用価値」と「交換価値」を分離させる本質的傾向を内在させているのである。ところがセイは、「交換価値」は「効用」ある他商品の量によって測定されると考え、「使用価値」と「交換価値」を結びつけてしまう。すなわち、「富」とは価値ある物の所有であり、「価値」は効用により「効用」は価値によって規定されるから、こうしてセイにおいては、「富」と「価値」が有する分離空間は塗り込まれてしまう。セイにおける「使用価値」と「交換価値」の同一視による「富」と「交換価値」の分離の否認、これをリカードウは「富と価値の混同」と呼んだのである。⁴¹⁾

以上、初・2版の最初の3つのパラグラフについて概観してきた。(三)で述べたように、第3版ではこれが5つのパラグラフに全面的に書き換えられたのだが、セイからの引用による「対照表」の新設、「地代論」の挿入、デステュット・ド・トラシの“労働論”の挿入という、すでに指摘した大きな変更点とともに、ここでは靴下から毛織物に参照事例が変更されていることに注意しておこう。『原理』第3版では、生産性の変動が当該生産物である毛織物自体にでなく他部面に生じる、という事例がとりあげられている。すなわち、そのばあいには毛織物の生産上の困難は変化していないのだから毛織物価値は不変と考えられるのだが、しかしセイは、毛織物が従来よりも2倍多くの他部面の商品と交換されるようになるから毛織物の価値は2倍になったとも言わねばならず、だからセイは「自己矛盾」に陥っている、と批判されたのである。生産性の変動が靴下の「価値」自体を変化させてしまう初・2版の靴下の事例に較べて、「交換価値」のみが変化する毛織物の事例では、セイにおける「価値」概念の混乱がより見極めやすくなっていると言えるだろう。このような改善された事例をもって、第3版のリカードウは、セイにおける「価値」の「生産費」規定と「効用」規定の混在を2欄表示した「対照表」の叙述へと向かったわけである。

初・2版では、以上の3つのパラグラフに続いて5つのパラグラフが記述されていた。このうち最

41) 「価値と富についての彼の説明では、常に分離されておらねばならない二つの事柄、アダム・スミスによって使用価値と交換価値と呼ばれる二つの事柄が、混同されてきたのである」(I.p.280)。

初の3つのパラグラフは、第3版でもそのまま載録されている(但し3つ目のパラグラフは後半3分の2がカットされている)。(三)で述べたように、そこでは、スミスの自然力評価に対するセイの非難に対するリカードウのスミス擁護論が展開されている。第3版はここで終わるのだが、初・2版ではまだ2つ余りのパラグラフが続いていた。

その最初のパラグラフ(第3版でカットされた後ろから3つ目のパラグラフの後続3分の2の部分)で、リカードウは『概論』から3つの長文の引用をおこなっている。それはセイのスミス批判に関して、「セイ氏自身が第二篇第1章では、価値についての類似した説明を与えている」(I,p.287)、つまりセイの誤りをセイ自身の言葉によって明らかにしようとしたものである。まずリカードウは、「『効用は価値の基礎であり、諸商品は何らかの仕方でも有用であるからこそ望ましいのであり、しかしそれらの価値はその効用、つまりそれらが望まれる程度に依存するのではなく、それらを獲得するのに必要な労働量に依存する。』」(I,p.287)という一節を引用している。しかしながら、労働が価値を規定すると明言しているこの第1の引用文は、セイの『概論』に見いだすことはできない。⁴²⁾ 第2の引用文は長文であるが、「社会状態」において必要とされる物は労働・資本・土地という「生産動因の協働」から生じ「生産費」が生じる、という内容のものである。⁴³⁾ また第3の引用文は、生産物をもたらすのに「必要な犠牲と経費」が「需要」の範囲を規制する、という内容をもっている。⁴⁴⁾ これら第2、第3の引用文は、いずれも第3版の「対照表」の左欄に照応する内容であり、したがって第3版の改訂とともに重複回避ということで削除されえたのであろう。

初・2版ではこの後さらに2つのパラグラフが続く。そこでは、「『価値』という用語と『富』という用語を混同することから生じる混乱」(I,p.287)をもっともよく示すものとして、セイの『経済学問答』の靴下の事例が再び取り上げられている。すなわち、靴下の生産性が2倍になり靴下の価値が半

42) 私たちは、この「引用文」に類似した一節をわずかに『概論』(第2版)第二篇第1章の、第2の引用文が採られた直前のパラグラフに、以下のように見いだすことができるだけである。スラッファはこのリカードウの引用文について、「最初の一文は自由な要約であり引用ではない」とだけ記している(*op. cit.*, I,p.287)。とはいえリカードウのこの明らかな「過読」に対して、書簡を読むかぎりセイが異を唱えた形跡はない。

「本書の冒頭ですで見たとおり、ある物の価値の第一の基礎は人間がそれに見いだす効用であった。この効用は、人間の身体的・道徳的本性、彼が住む気候・習慣、彼が属する社会の法律、と密接に結びついて生じる。」(Say, ed.2, tom.2, p.2)

43) 念のため、長文ながら第2の引用文に対応するセイの『概論』(第2版)第二篇第1章の一節を以下に引いておく。文中、傍点部分(° °)がリカードウの引用の主旨部分、またアンダーラインは後に再引用される一節である。リカードウの翻訳はほぼ正確におこなわれていると言える。

「このように理解されたある物の効用は、それを人に望ませ願望させて、その物の需要を確立するのである。それを獲得するのに望めば十分であるのならば、それは、人の欲求に対して無限に与えられており、人が何らかの犠牲の代価でそれを購買することなしに享受するような、自然的富とみなされうる。空気・水・日光のようなものがそれである。もし彼がこのような方法で欲求と願望のすべての対象を獲得するならば、彼は無限に豊かになるだろう。彼は何物についても不足しないだろう。／不幸なことに事実はこうではない。大部分の物、私は、単に彼にとって便利で快適な物だけでなく、特に社会状態(人はそのために独自に形成されているように思われるのだが)において必要不可欠である物についても言っているのだが、これら私が言う大部分の物が彼に無償では与えられないのである。それらは一定の労働の能力、一定の資本の使用、そして多くのばあいには土地の使用によってのみ存在しうる。ここにこれら諸物の無償の享受を妨げる困難があり、真の生産費が生じてくる困難がある。なぜならばこれらの生産動因の協働は支払われねばならぬからである。」(Say, ed.2, tom.2, p.3)

額になるばあい、セイは、靴下1足の価値は低下するが靴下2足の所有によって価値＝富は減少しないと言っているが、しかし同時に他方では、改良が全部面に普及し「同一の下落が全商品に同時に起これば」、価値は不変だが社会は「以前の2倍だけ真に豊かになるだろう」、とも言っている。つまり、富は、最初は生産の難易によって、次には獲得される財貨の量によって評価されていて、ここには明らかに富の測定についてのダブル・スタンダードが認められる。セイにおける富と価値の無区別は、このような用語上の混乱を招く。リカードウはこう批判するのである(cf., I, pp.287~8)。この靴下の事例は、1足の靴下の価値は減少するが効用＝富は不変のままである、という既に展開された事例と、議論としてはまったく同型である。こうして第3版で毛織物のより適切な事例が導入されるとともに初・2版のこのパラグラフも削除された、と考えられる。

初・2版の最後のパラグラフの末尾を、リカードウは『概論』の二つの相対立する引用で締めくくっている。すなわちセイは、一方では「もし人が欲求する全対象を無償で獲得できるならば、彼は価値あるものなしに無限に豊かである」(I.p.288)と言いながら、他方では「生産物は価値をもたなければ富ではないのだから、富は生産物それ自体にあるのではなくて生産物の価値にあるのである」(I.p.288)とも言っている、と。⁴⁵⁾前者は「富」に、後者は「富の価値」に関連する。しかしこの点もすでに述べられたことであり、だから『原理』第3版の改訂に際してこの部分は削除されえたのであろう。

以上、『原理』第20章の初・2版を第3版と対比しながら読んできた。初・2版に較べて第3版は、明らかにより整理された叙述になっている。だが初・2版の、靴下の事例の重複した記述、“労働価値説”的文章の強引な作成、引用文の羅列のみによる“富と価値の混同”の批判、といった叙述は、問題の言わば“原型”を生のかたちで残しているだけに、かえってリカードウの真意を探り当て易いとも言える。私たちは第3版との対比によって、富と価値、価値尺度、効用、交換価値、生産費、生産的用益、自然力、労働、といった問題群の所在を確認できただろう。これらのテーマに即したリカードウのセイ批判の総括的な展開は(七)でおこなうこととして、その前に次項ではもう一度「書簡」に戻り、『原理』第3版出版後のリカードウとセイの論争テーマが最終的に何であったかを確認しておくことにしよう。

44) 第3の引用文も、同じく『概論』(第2版)第二篇第1章に見いだすことができる。この引用もほぼ原文どおりと言えるが、リカードウの読み込みの痕跡も確認できる。というのは、ここでセイが言っているのは、物が価値をもつのは生産的動因の活動によって「効用」が一つに結びつけられることによってであり、したがって「効用」は需要の基礎であるとともに価値の基礎でもある、ということなのだが、ところがリカードウは、引用文中の後半部分を突出的に取り出して、「犠牲」→「経費」→「労働量」という連想から「労働量による諸商品価値の規定」という第1の引用文に近い意味内容を作り上げているからである。

「一つの物が生産物であり価値をもつのは、この効用がこのように一つの物に結び合わされた *communiquée* ときのみである。その効用はそれによってつくられる需要を確立する。しかし、それを獲得するのに必要な犠牲と経費、換言すれば、それをもたらしするために必要な価格は、その需要の範囲を制限する。」(Say, ed.2, tom.2, p.4)

45) この2つの引用文は、いずれも『概論』第二篇第1章から採られている。すなわち前者は、注43)に示した第2の引用文中の文言(アンダーライン箇所)、「もし彼がこのような方法で欲求と願望のすべての対象を獲得するならば、彼は無限に豊かになるだろう」(Say, ed.2, tom.2, p.3)から(一部言葉を補いながら)切り取られたものであり、また後者は、それより少し前の、「生産物は価値をもたなければ富ではないのだから、富は生産物それ自体において存するのではなくその価値において存するのである」(Say, ed.2, tom.2, p.2)から採られたものだろう。これらの章句は『概論』第4版では全面的に書き改められ原形を止めていない。

(六)

『原理』第3版の出版(1821年5月)以降、リカードウとセイの間には主なものとして3通の書簡が確認される。⁴⁶⁾ すなわち、セイの1821年7月19日付書簡(446)、リカードウの1822年3月5日付書簡(488)、そしてセイの1822年5月1日付書簡(496)である。これらの書簡では、“価値論”と“地代論”が議論されている。いずれも長文で、両者それぞれが自説を掘り下げて展開しており、論争の核心を見極める上で恰好の素材を与えてくれる。本項では、3通のうち2番目のリカードウの書簡を軸にその前後のセイの書簡を織り込むというかたちで、多少大胆に論点の析出を試みることにする。

まず“価値論”について。議論は、「人が1封度の金に対して与える服地が1封度の鉄に対して与える2,000倍であることは、人が金に対して付す効用が鉄に対して付す効用の2,000倍であることを証明するか?」という、『原理』第3版の問い(*cf.*, I, p.283)をめぐっておこなわれている。「効用」と「交換価値」は別物だから、当然、答えは「否」であるが、ところがセイは、「富は量に依存しないで価値に依存する」と述べて「富」と「価値」を同等視している節があるから、上の問いに「否」とは答えられまい、こうリカードウは言いたいのである(IX, p.169)。

これに対してセイは、「自然的効用」あるいは「自然的富」という概念を導入することによって反論している。⁴⁷⁾ すなわち、1ポンドの鉄の効用2000は「自然的効用」1999と「勤労・資本・土地によってつくられる効用」1の産物で、1ポンドの金の効用2000はすべて「勤労・資本・土地の果実」2000であると想定するならば、金の効用は鉄と等しくてもその価値は2,000倍になる、つまり「価値が不等であっても人にまったく等しい利益を与える」ことはありうるのだから、私も「否」と答えることができるのだ、と反論した(*cf.*, IX, pp.33~4)。そして、このように「富を物の交換価値の上に基礎づける」自分の学説は、「事実 *faits*」に合致するだけでなく、「評価できる量」を扱うから「科学的」である、と自賛する。⁴⁸⁾ そしてさらに、「価値の観念は比較および交換の観念と分離されえない」のだから、そもそも「効

46) これ以外には、デンマーク皇太子の経済学教育依頼を問い合わせたセイの1822年5月8日付の短い書簡(498)があるが、以後リカードウの死(1823年9月)に至るまで、『リカードウ全集』には両者間の書簡は載録されていない。だが、リカードウの二度目の大陸旅行(1822年7月~12月)の際のパリでの会見や友人たちとの書簡(*cf.*, 512, 513)を読むと、それは交信の途絶というよりも論争の平行線状態での一応の終息、と見た方が良いだろう。

47) 「自然的富 *richesses naturelles*」の概念は、『概論』第4版「梗概」中の「富 *Richesse*」項で、空気・水・日光のような「各人が自由に享受でき……無償で与えられる」自然力が生み出す「富」と定義され、「人が所有し、承認された価値をもつ諸財貨」から構成される「社会的富 *richesses sociales*」とは区別され、経済学は「社会的富」を対象とし「自然的富」は除外される、と述べられている(*Say*, ed.4, tom.2, pp.500~1, *cf.*, tom.2, pp.5~6)。このような区別は、価値を有するもののみが富であり、「富はそれを構成する価値の総額が大きければ大きい」とだけ述べていた『概論』第2版(第一篇第1章)には見られなかったものである(*cf.*, *Say*, ed.2, tom.1, p.2)。実際、「自然的富」という言葉そのものとはかくとして(*cf.*, *Say*, ed.2, tom.1, p.3)、『概論』第2版「梗概」中の同じく「富」項にも、まだ「自然的富」と「社会的富」の概念的区別を見いだすことはできない(*cf.*, *Say*, ed.2, tom.2, pp.472~4)。この概念はリカードウとの論争を通じて形成されていったと考えてよいだろう。

48) 「この学説はさらに、評価できる量 *quantités appréciables* を論ずるという長所(あらゆる科学的学説の本質的な性格、研究者の前進を唯一保証できる性格)をもっています。なぜならば、私たちの財貨を大きくあるいは小さくさせるものを知るためには、結局、それらを構成するものが大きいか小さいかを知らなければならないからです。」(IX, p.32)

用価値」という語は「語法矛盾 incompatibles」「反意味語 comme un contre sens」なのであって、私たちは「効用価値（使用価値）」に留まっていはいけなないのであり、だから例えば水のような「交換の目的物」にならない「自然的富」は経済学の研究対象からは除外すべきなのだ、と主張したのであった（cf., IX, pp.32~4）。

この「自然的富」の概念を用いたセイの説明に対して、リカードは、「用語にはまったく同意できないが」「それを証明する推論には実質的に賛成している」という評価を与えている（IX, p.169）。それは、「富」から「自然的効用」が剥ぎ取られることによってセイにおいても「労働」が端的に現れ出てこざるをえず、そのことは「労働」による価値の規定を基軸とする自説への接近を意味しうる、と期待されたからだろう。⁴⁹⁾ リカードは、「労働」が創造する“増大する富”の相との関連でセイの議論を評価している。そのことは、これに続くリカードのセイ批判が、いずれも「経済的方法」の発見による労働生産性上昇という事例を使って展開されていることから窺い知ることができる。⁵⁰⁾

この“増大する富”という視座が実はセイ自身のものでもある、と考えている節がリカードにはある。例えば1821年7月19日付の書簡(446)の冒頭でセイは、「人間が富を増大させる可能性」という点でのリカードとの「意見の一致」について語っている（cf., IX, p.31）。また1822年3月5日付の書簡(488)でリカードは、セイが『マルサス氏への手紙』において自らの『概論』を評して、「一般的富は諸商品およびあらゆる種類の生産物の低い価格によって増大するということを説明した点で、この科学にいささかの貢献をしたように思われる」と述べていることを、好意的に引用している（cf., IX, pp.170~1）。

実際セイは、「生産物」の「交換」において「新しい富」を生産する「生産的収益」の「交換」を見、「富」を増大させる「生産」を語ろうとしている。⁵¹⁾ セイにおいて、「富」が“需要者(生産者)”の側から定義されるのもこのためである。人々は、お互いがお互いの「生産物」を「費用」を支払って「生産的収益」として交換し合う。この交換の領域からは、水や空気や太陽光のように、人々に大きな効用を与えるが私的

49) 「というのは、私は常に、諸商品はそれらに投下された労働の量に比例して価値があると主張してきたし、そしてあなたが、諸商品はそれらが有用であるのに比例して価値があり、また諸商品はそれらに投下された労働量または勤労に比例して有用であると言うとき、あなたは事実上、同じ意見を別の言葉で表現しているからです。」(IX, p.169)

50) リカードはセイの「推論 reasoning」には同意を与えつつも、その「用語」の不適切さから生じる「矛盾 contradiction」を、次の2つの事例によって示している。すなわち前述の金と鉄の例で、例えば、①もし何らかの「経済的方法 economical process」の発見によって、金の効用2000をもたらす労働の効用が従来の2000から1000に軽減されるならば、1封度の金の効用は不変のままにもかかわらず、セイは金の交換価値が半減するから富は半減すると言わねばならぬのではないか。同様にまた、②もし「経済的方法」による生産性の上昇が金だけでなく帽子・短靴・服地・リネンの価値も下げるばあい、「1ポンドの金をもつ人は以前と同等に富んでいるだろうか？」という問いに対して、富は価値に比例すると定義するならば、すなわち「価値を富の尺度と考える」ならばセイは「否」と答えねばならず、また富は支配できる財貨の量に比例すると定義するならば「然り」と答えねばならぬだろう、と（cf., IX, pp.169~170）。不適切な定義を温存するがぎり、セイは新たな「経済的方法」が生じるたびに別の数値設定をおこなうか、あるいは“増大する富”そのものを排除してしまうか、そのどちらかを余儀なくされるだろう、とリカードは言いたいのである。

51) 「別の言葉で言えば、唯一の新しい富は、生産的収益、すなわち私たちの勤労・資本・土地の最初の果実であります。人はそれらを相互に交換し、あるいはそれぞれの生産物を交換します。そして、他の物をもつためにさし出すある物の量がそれに人が付す価値の指標であり、私たちの研究の唯一の主題となる価値です。」(IX, p.33, cf., IX, p.171)

所有の対象でなく、「交換の目的物」とならないために何ら「需要の対象」にならない「自然的富」は除外される。また「租税」は、逆に「費用」を生じて「効用」を与えず消費者に価格のみを支払わせるものだから、これもまた除外される。こうして、「費用なき効用」と「効用なき費用」という両極を排除して、「費用を伴って与えられた効用」という固有の経済的領域が「社会的富」として設定されてくることになる (cf., IX.p.33)。

問題は、自然的諸力を排除した「社会的富」において“増大する富”を語りうるか、というところにある。一方にとっての生産的用途は他方にとっての生産物であり、生産的用途と生産物のこの相互的な等価性の中で、では「新しい富」はどこから創出されるのだろうか。セイが後便(496)でリカードウに反論したように、「社会的富」の領域においては「富は価値に比例し価値は物の量に比例する」のだから、「富」と「価値」は分離せず、定義上の撞着も生じえないのは確かなのだが、⁵²⁾ ではこの撞着のない言わばプレーンな空間において、“増大する富”はどこから出てくるのだろうか。こうして「経済的方法」による生産性2倍の事例で指摘されたように、セイは各人の富は増大しないと言うとともに「総体的には」彼らは以前の2倍富んでいるとも言うように、分裂的な言表をおこなわざるをえなくなる、とリカードウは批判するのである。⁵³⁾

セイは、自分の「背理」を意識している。しかしセイは、リカードウは「所有者」を抽象的にのみとらえており、これに対して自分は、「経済学が取り扱う富は常に相対的なもの」と考えており「富は絶対的に語られうるとは思わない」という、富という言葉の解釈の方向に議論をもっていく。⁵⁴⁾ つまりセイは、「私は社会的富の観念を所有者の観念から分離することができない」(IX.p.190)のであり、所有者や所有団体の富への具体的欲求を念頭に置き彼らの目にどう映るかを抜きにしては「富」は考察しえない、と主張する。そしてこのような自説こそ、「所有者」の欲望にも配慮したあらゆる現象を首尾一貫して説明しうるものであり、定義上の「冗長さ」や「複雑さ」を招くからと言って私を非難するのは「不公正 injuste」である、と力説するのである (cf., IX.pp.190~1)。⁵⁵⁾

52) 「私たちの意見の一致を妨げるものは、すべてあなたが、社会的富(または交換価値)についての経済学の考察の中に自然的富(または何ら生産的用途の果実ではなくてスミスが使用価値と呼んでいる効用)を混入しようとするからです。この2種類の富について述べている私の『問答』(第2版)201頁と『概論』(第4版)第2巻500頁を、どうぞご再考下さい。」(IX.p.190)

53) 「確かにこの説明では、富と価値という言葉は必ずしも同じ意味では用いられていません。私の見地に従えば、彼らは単独でも総体的にも2倍富んでいるが、彼らの富は価値においては増大しなかつただろう、それらは価値においては増大しない、なぜならばそれらはもっぱら労働によって与えられるかの効用を何らより多くもたないだろうからだ、ということになるでしょう。」(IX.p.171)

54) 1822年3月5日付のリカードウの書簡(488)に、セイは「富」概念の“具体性”についての以下のような「書き込み」をおこなっている。

「リカードウ氏は、ここで背理 paralogisme を発見する。なぜならば彼は所有者の抽象をおこなうからだが、これに対して私は決してそのような抽象はおこなわない。私は、富は人が所有するものの価値に比例する、そして人が所有する価値は人が獲得できるものに比例する、と言うのである。私は、人は富を絶対的に語りうるとは思わないし、経済学が取り扱う富は常に相対的なものと理解している。」(IX.p.170)

55) 「私には、この学説があらゆる現象を説明し、人が所有する富は彼的手段で購買できる諸物の量に比例するという原理と首尾一貫しているように思われます。」(IX.p.191)

だが、「所有者の観念」を接ぎ木したこのように“伸縮的”なセイの「富」の解釈は、逆に、セイの「社会的富」が“増大する富”を理論的に展開しえぬことを語り出してしまっている。単に用語の拡張解釈によってでなく、生産的用途が生産物になり、生産物が生産的用途になるという、ある種閉塞的な「社会的富」の領域そのものが解体され、「富」と「価値」の差異を胚胎させる「自然的富」が、「労働」とともに再び呼び込まれねばならぬのではないのか。セイは、これを「土地」に関してのみおこなう。ここにもう一つの論点である“地代論”におけるリカードウとの対立が生まれる。

“地代論”に関してリカードウは、「等しくない豊度の土地からひき出される地代は異なっているにもかかわらず等しい価値をもつ2つのパンがもたらされるという事情」について、まず「私たちは多くの点で一致している」と述べている(IX.p.171)。前便(446)でセイは、土地の所有者は土地の自然力を独占するが故に地所の肥沃度に応じて地代を受け取る、と答えていた。⁵⁶⁾しかしこの答えは、地代は土地豊度によって相違すると語るだけで、リカードウの問題に答えているとは言えない。リカードウは、異なる地代をもたらすにもかかわらず生産物の価値が同一であるのは何故か、を問うたのだからである。

生産物の価値は「生産の難易」によって決まる、とリカードウは考えている。確かに土地所有は地代をもたらすから、セイが言うように「地代」は土地の「独占」の「結果」であるとも言える。だが、上昇した「価値」がその一部を「地代」として「独占」に獲得させるのであり、その意味で「地代」は「価値」の結果なのである。したがってすべてのパン塊が地代を支払うとは限らず、地代を支払わない土地の存在も想定されうる。⁵⁷⁾所有なしに地代はないが、所有を根底で規定するのは「価値」を規定する「生産の難易」である、とリカードウは“地代論”の大枠を指示するのである。

地代を土地の「自然力」からでなく「価値」から導出するこのようなりカードウの“地代論”は、ある程度セイの「需要と供給の学説」と重なる面も持っている。すなわちセイは、欲望は需要を生じさせ、「ある物がそれに要する生産費に値いするとき人はそれを生産する」し「それに付す価値がその物の存在のために必要な生産的用途の価値に等しくないとき人はそれを生産しない」と言い(cf., IX.pp.35~6)、地代をもたらす「価格」を「生産費」のみによっては規定せず、「価格は需要と組み合わされた供給の結果」(IX.p.172)であるととらえている。土地生産物の価格(「価値」)が、「土地」の豊度(「生産費」)とは別に言わば外側から与えられているという点で、このセイの“需給説”はりカードウ“地代論”との同型性を指摘しうるのである。事実セイは、地代=ゼロの無地代地の存在についても言及している。⁵⁸⁾

56) 「自然は地所の所有者に対して、彼がこの必要不可欠の用途の独占権をもつがゆえに、消費者に支払わせうる生産的用途を贈る。自然が彼におこなうこの贈り物は、地所が肥沃であるほどより大きく、痩せていればより小さい。」(IX.pp.34~5)

57) 「地代はある一定豊度の土地の独占の結果であり、パン塊の価値とともに、また追加的なパン塊を生産する困難とともに、上昇しなければならない。しかし生産された最後のパン塊は、地代をほとんどまたは少しも支払わない。またその最後のパン塊の価値は、他のすべてのパン塊の価値と同様に上昇する。なぜならば、その効用のより大きな量が労働と勤労からひき出され、そのより小さな量が自然的手段からひき出されるからである。」(IX.pp.171~2)

58) リカードウの書簡(488)への「書き込み」で、セイは言っている。例えば、もし人があるパンを5シリングで需要し、労働が2シリング、資本の利子が1シリングと決まっているならば、地代は2シリングになるし、他方、パンがもし3シリングで需要されるならば地代は0シリングになるだろう、と(cf., IX.p.173)。リカードウがセイの“需給説”に対して、「それは本当 true である」と同意を与える所以である(cf., IX.p.172)。

リカードウが反対するのは、「価値」を規制する「生産的用途」の中にセイが「土地」を算入し、賃金・利潤だけでなく地代によっても「生産費」を規定することである。リカードウは、「私は生産的用途をひとまとめにひっくるめることには反対である」(IX.p.172)と言い、「私は各々がパンに価値を与えるに際しておこなう役割 part を知りたい」(IX.p.172)のだと問題を設定し直し、地代を生産費に混入させず、したがって一方で労働と資本という2つの生産的用途によって規定される生産物の「価値」と、他方で賃金・利潤・地代という3つの収入範疇に分解していく生産物の「価値」が向かい合う、言わば“段差”をもった不揃いな“再生産論”を設定するのである。これに対してセイのばあいには、労働・資本・土地という3つの生産的用途によって産出される生産物の「価値」が賃金・利潤・地代という3つの収入の「価値」に分配されていくという、対称的で整合的な“再生産論”が現れてくることになる。

それにしても、「自然的富」として価値の領域から排除されたはずの土地の自然力が、セイにおいてはどうしていつの間にか「社会的富」に取り込まれえたのであろうか。セイは言う。もし誰もが土地に自由にアクセス可能ならば、土地の豊度は帆をふくらませる風の有用性と同様、何ら支払われまいだろう、と。⁵⁹⁾ これは裏返して言えば、土地が私的に所有され自由なアクセスが遮断されるならば、土地の自然力は「社会的富」に転化し「生産費」が支払われるようになる、ということの意味している。そしてセイは、「生産の進歩」とは、無償の自然力が有償の「生産的用途」に置き換えられていく過程である、とも述べている。⁶⁰⁾ こうしていったん排除された「自然的富」である「土地」が、「生産の進歩」とともに「所有された土地」として「社会的富」の中に編入されていき、「生産費」に混入され、増大する「生産費」がパンの価値を押し上げることによって、土地の優等性の程度に応じて「地代」がもたらされる、という“歴史的必然”が語られるのである。このようなセイの“地代論”をリカードウは、「将来の実践の導きにならない」(VII.p.380, cf., IX.p.35)と論難したのであった。⁶¹⁾

(七)

本稿はこれまで、「価値と富、その示差的な特性」と題された『原理』第20章を、第3版の改訂箇所と「書簡」での理論的応酬の吟味を通して検討してきた。“富と価値の区別”に関する議論は、結局は“価値論”と“地代論”に収斂されていくのだが、用語上や定義上の論争を通して、「労働」概念との関わりで“資本蓄積論”の伏在が感得されたことと思う。最後にこの見地から、第20章の総括的な叙述を与えておこう。

59) 「もし地所の用途が無限で無尽蔵で、全世界の手の届くところにあるのならば、それは全世界におこなわれた贈り物であり、私たちは支払うことなしにそれを享受するでしょう。あたかも私たちの帆をふくらませる風のように、私たちが欲する度毎に私たちはそれを役立たせるのです。」(IX.p.35)

60) 「反対に、生産の大きな進歩は、自然の無償の用途の労働・資本・土地の費用のかかる用途への代置に存する、という結論をひき出せると私には思われます」(IX.p.35)。

61) 1821年5月8日付の書簡(430)でのリカードウのこの論難は、セイの「経済学の現状 the present of the science に関する知識」の遅れを嘆いた1821年4月25日付のマカアロク宛書簡(428)と同じ口吻をもつものである。セイは1821年7月19日付書簡(446)で、これに反発している。

「価値」という言葉をめぐって、リカードウはセイの定義上の曖昧さを批判した。セイのばあい、「効用」という概念が「富」の使用価値としてだけでなく、交換価値の尺度としても、つまり購買・支配される他財貨の量(使用価値)で表現される交換価値の尺度としても用いられるために使用価値が二重に現れてしまい、「生産の難易」の変動とともに用語上の混乱が生じてしまうのであった。リカードウは、「価値」が「富」に関連する概念であることを強調し、セイにおける「価値」の「交換価値」への横滑りを批判した。それは、「労働」による「富」の創造という次元の存在を主張することでもあった。

これに対してセイは、「自然的富」と「社会的富」の区別によってリカードウの批判に応えようとした。経済学の対象を「社会的富」に限定することによって、自然力のみがもたらす言わば“使用価値としての使用価値”は除外され、“交換価値を有する使用価値”のみが考察の対象とされた。こうして、「富」と「価値」に関する用語上の「矛盾」はひとまず回避され、セイにおいては「富」が「使用価値」と「交換価値」を両項とする「商品」として現れてくることになる。

「社会的富」の領域においては、“生産物の交換”とともに“生産的用途の交換”がおこなわれる。生産物の所有者は、他者の生産物の「生産的用途」を求めて自己の「生産物」を手放す。その際「生産物」は、販売者にとっては「生産費」という「交換価値」をもつ「効用」であり、購買者にとっては「生産的用途」という「使用価値」をもつ「効用」であるから、セイが言ったように、「生産物」と「生産的用途」と「生産費」は等価値なのである。⁶²⁾とはいえ、販売者にとっての「生産物の価値」＝「生産費」と購買者にとっての「生産的用途」＝「生産物の価値」の主観的な差は存在している。セイが興味深いのは、「生産物」＝「生産的用途」＝「生産費」という“経済的空間”が抱懐するこの「評価価値」の内面的なズレを、“需要者”(購買者)の側から主体的に統合＝再組織しようとしたことである。すなわち“需要者”は、現在と将来の2つの「価値」を比較考量して「生産的用途」を獲得し、「新しい富」の「生産」に向かうのである。ここにセイの「企業家」概念が登場してくることになる。⁶³⁾

62) セイは『概論』(第4版)「梗概」中の「物の価値」項で、「生産物の価値、生産的用途の価値、生産費の価値は、それゆえ、事物が自然的コースに委ねられているときには常に、同類の価値 valeurs pareilles なのである」(Say, ed.4, tom.2, p.508)と言っている。リカードウは『原理』(第3版)の対照表の(4)でこの一節を、「商品の価値、生産的用途の価値、生産費の価値は、それゆえ、あらゆる事物が自然的コースに委ねられているときには、すべて類似的な価値 similar value なのである」(1.p.283)と、若干用語を変えて引用した。同箇所は、さらに『原理』第32章の注(第3版で改訂)では、「生産物の価値、生産的用途の価値、生産費の価値は、それゆえ、事物が自然的コースに委ねられているときには常に、すべて類似的な価値なのである」(1.p.421)と、より正確に引用され、セイにおける「純生産物」の消失が批判されている。セイは、この“生産物の価値＝生産的用途の価値＝生産費の価値”という議論を、『概論』第5版では「物の価値」項の書き換えとともに削除している。そして「梗概」中新設された「年所得 Revenu Annuel」項では、「国民所得はその国の総生産物、すなわちあらゆる生産物すべての価値全体と等しい。なぜならば、ある生産者がその純生産物を知るために総生産物から控除する費用は、誰か他の生産者の所得の一部を成すからである。」(Say, ed.5, tom.3, p.518)と、生産物間の関係の中での定義に変更している。

63) セイの「企業家」は、『概論』「梗概」中の「産業の企業家 Entrepreneurs d'Industrie」項での解説を見ると、資本を領有する「資本家」というよりも「産業者」に近い概念と言える。すなわち、「産業の企業家は、獲得された知識・諸資本の用途・自然的動因の用途を社会の必要に適用させることで生産に協力する concourent」(Say, ed.2, tom.2, p.449)、と述べられているように、諸「用途」の結合によって社会的に価値ある生産物の産出に協力・競合する「産業」の主体的組織者として定義されている。この『概論』第2版での定義は、第4版では、「産業の企業家は、獲得された知識・諸資本の用途・自然的動因の用途を人間が価値を付与する生産物の製造に適用させることで生産に協力する」(Say, ed.4, tom.2, p.469)と、若干「価値」的なニュアンスを強めた修正をおこなって再掲されている。

「新しい富」を可能にするものは、「機械の発明・熟練の向上・より良い分業・新市場の発見」である。これら「労働」生産性の変動と「市場」範囲の拡大とは、「生産物」「生産的収益」「生産費」のそれぞれの価値の間に絶えず“差異”をもたらし、富と価値を乖離させることによって“社会的剰余”の獲得機会を拡大する。だが他方、“社会的剰余”のこの獲得機会は、社会的諸制度による抑制も受ける。例えば、穀物輸入の制限は、劣等地耕作の必至化によって自由貿易がもたらす「富」増大の可能性を殺ぎとってしまうだろう。だから、「価値」が同一であっても異なる量の「富」を産出する2つの国が想定されうるのである。もちろん社会的諸制度の背後には、特定方向に「社会状態」を誘導する所有関係が潜在している。

セイは、「生産の進歩」とともに自然力としての「土地」が「所有された土地」に転化し、「土地」の「生産的収益」が「地代」をもたらすようになる、と言った。こうして、「社会的富」からいったん除外された「自然的富」が、「社会的富」の中に再び組み入れられることになる。だがこの“歴史的”な事態説明には、「土地所有」が紛れ込んでいるのではないだろうか。「自然的富」の「社会的富」からの排除による自然力なき「労働」の措定と、自然力としての「土地」が「社会的富」に転化する際の暗黙裡の「土地所有」の前提。『原理』第20章のリカードは、“穀物尺度論”によって「社会状態」なき「労働」を措定したスミスも念頭に置きつつ、この両面においてセイ批判を展開したと思われるのである。